

共生社会推進市民会議の設立に向けた第 2 回世話人会 報告書

2022/11/05

2022 年 10 月 6 日（木）19 時より。真庭市役所本庁 3 階にて。

真庭に暮らす人たちや関わりのある人たち、そのほか自然環境などが「共生社会」に向かえるよう「共生社会推進市民会議」の設立を想定。世話人会、発起人会、市民会議と共生社会の輪を広げていくため、第 2 回世話人会を開催した。

ただ、その輪の広がりようはだれかによって強制されるものではなく、その気運や流れ、背景をくみ取りながら、自然と広がっていくもの。そのため、あらかじめ用意されていた世話人会、発起人会、市民会議という流れ、枠組みに捉われず、常に「まだ見ぬ第 3 の選択肢」を念頭に模索していけたら、と考えている。

第 1 回の会議を受けて、今後この会議をどう発展させていくのか、延々と第 1 回のような内容をくり返して、はたして「共生社会を広げていくこと」ができるのか、正直なところとても不安だった。

どうすればいいのか。議論を重ねるなかで、ひとつ「哲学カフェのようなスタイルがいいのではないか」というアイデアが出た。哲学カフェとは、議題を決め（ときには議題を決めるところから）、数名の対話・話し合いを通じて、自身の考えを深めていくものである。

たとえば、その議題を共生社会と絡めたもの（共生社会×音楽・共生社会×地域づくりなど）にして、市内の各地で行えば、共生社会の醸成になるのではないかと。

「一度、やってみよう」ということで、市の職員を含めた 5 名で実際に開催。「お金」をテーマに、プレとしての哲学カフェを行なった。その結果、「テーマについて、改めて考えられる空間になる」ことができた。

どんなテーマを選ぶか、によって場のクオリティが変わるとい難しさはあれど、哲学カフェのスタイルに可能性を見出し、第 2 回は「今後の展開」も視野に入れた問いを立てた。

「今後の展開」が気がかりになったきっかけがあった。

たまたま委員のひとりである池永京子さんにお会いした際、「共生社会のって、どんな会議なん？」と尋ねられて、うまくその魅力を答えることができなかった。意義や面白さを伝えることができなかった。

それを言葉にすることができないあいだは、「広く共生社会を知ってもらうこと」に繋がらないだ

ろう、という問題意識を抱えながら、第2回の会議に臨んだ。

こちらから用意した問いを投げかけ、フリップに回答いただく方式。

第1問は「前回の会議から約1ヶ月、そのあいだ共生社会についてどんなことを考えましたか。また触れる機会がありましたか?」。はじめての参加の方については、「共生社会に触れる機会がありますか?」と尋ねた。

・市議会の質問で。映画「咲む」で。

映画「咲む」とは、限界集落で活動するひとりのろう女性の物語。

・障がい者施設での事件と子どもさんの義手の話。

障がい者施設での事件とは、2016年に相模原市の知的障害者施設「津久井やまゆり園」において、元施設職員が入所者19人を殺害、26人に重軽傷を負わせた事件。

・真庭社協の「たべものステーション」への協賛（寄付）について、真庭医師会会員への依頼を進行中。

・ちよっと許す。

・共生社会って何だろう?

・すみません。ないです。実はあったり?

・特にありません（活動）。今日のために少々、資料を見ました。

下記は、初参加の方。

・仕事の中で多用している。県立大の講義でSDGsの文脈の中で触れた。男だから、女だから、と思わないようにしている。

・映画「NAGASHIMA〜〈かくり〉の証言〜」。

映画「NAGASHIMA〜〈かくり〉の証言〜」とは、ハンセン病ドキュメンタリー映画。ハンセン病患者の収容、隔離の歴史を追っている。

・意識して口にしたのは、仕事上。ニュースが気になる。今は韓ドラで！ 現実には特に記憶なし。

「共生社会」という観点には、じつにさまざまなものごとが含まれている、と思わずにはいられない。ろう者、性差、知的障がい者、貧困層、ハンセン病患者、外国人……。回答を一周しただけでも、多岐にわたる人たちの話題があがった。

そしてここから先が、「今後の展開」を視野に入れた問いになっていく。

第 2 問は「共生社会を考えるうえで、どんな方のお話を聞いてみたいですか？」。

- ・若い人（ここにいない方）。先行自治体。実践者。
- ・地球とか、海。
- ・アカデミック（岸見一郎さん・熊谷晋一郎さん）

岸見一郎さんは、アドラー心理学を研究する哲学者。熊谷晋一郎さんは、脳性まひの小児科医。

- ・偉大なるふつうの人。
- ・障害のある人（ともに生活するには、何を必要としているか。ひと・もの・かねなど）
- ・視聴率風。
- ・価値観が違う方々の対話。
- ・野生生物に関わっている人。ハンター。縄文時代の人。
- ・都市部の高校生と真庭の高校生。
- ・渋谷寿一さん

第 3 問は「この会議に、第 2 問に該当する人や新しい人を誘うにはどうすればいいでしょうか？」

- ・数打てば方式で。つないでいく。
- ・腹が立ったこと、不条理だと思ったこと、一緒に考えて。
- ・外に出てみる。
- ・ともに暮らしていくために、私たちは何をすればいいのでしょうか、教えてください。
- ・困ってること、ない？
- ・宗教家。でも、絶対に見せものにしてはいけない。
- ・「会議」という言葉を使わない。
- ・いちおう説明した後に、とりあえず 1 回つきあって！ 来たらわかる。
- ・話したいこと話していいから、人の話を聞きに来ない？
- ・いちばん不満なこと話していいから、来月来ない？
- ・押しかける。宴会、パーティー。対話（スピーチではなく）。

第 2 問について、第 1 問で多岐にわたる境遇の人たちが出たにも関わらず、無意識のうちに「話を聞きやすい人たち」を選んで自分を猛省。まっすぐ「障害のある人」と記した回答

が印象的だった。

第3問はまさに、委員のひとりうまく共生社会の会議の魅力を伝えることができなかった、そのできごとから生まれた問いかけ。

困りごとの「共有」と、「対話」がキーワードとなり、どうやら「会議」というあり方ではないんだろうな、となんとなくみんなが感じているようだった。哲学カフェの話題には触れなかったが、対話をベースに会を進めていくのであれば、哲学カフェもありだなと感じた。

どうすればもっと広く共生社会を知ってもらえるのだろう。どうすればもっと深まっていくのだろう。そう考えるなかで、どうしても「今後の展開」に意識が寄ってしまう。「結論を急がなくてもいい」ということを承知しながらも、この焦りや煩悶とする気持ちも引き続き、報告書に記していこうと思う。

休憩を挟み、その後はフリートークを展開した。下記、その中で印象に残った内容。

- ・質問すべてが難しかった。
- ・共生社会という言葉が上滑りしないように。
- ・いかに自分ごととして捉えられるか。
- ・共生社会をいろんな方に知っていただきたい。
- ・声なき声をどうすればすくい上げられるか。
- ・見返りの少ない社会で、若い人たちは社会をどう捉えているのか。
- ・中学生、高校生から話を聞きたい。
- ・できれば、生徒会や授業内などではないなかで。

今回は、中学生あるいは高校生に話を聞いてみよう、という内容となった。

ただ、話はそこで終わらない。参加者のひとりから問いかけがあった。

「消防士の台所」というイベントを行なったときのこと。

福祉事業所も出店しており、その利用者（知的障がい者）さんが会場内の音楽に合わせて踊りはじめた。それを「いいな」と思いながら眺めていたが、ふと一般客がその様子に「あっ」となっているのを見て、自身も「あっ」と思ったという。

決してポジティブではない、むしろネガティブな「あっ」であった。

「障がいなどに対して、理解があるほうだと思っていたのに、一般の方の〈あっ〉という反応が伝播して、自分もそう思ってしまった。もやもやする気持ちを抱えている」

それについて、さまざまな意見が出た。

委員のひとりが、23歳の知的障がいがある甥が、85歳の義父にほおずりすることを紹介。家族のなかではとても微笑ましく思えるが、人前でされると「恥ずかしい」という気持ちになってしまう。人の目を気にしている……。

- ・理屈ではわかっているが、慣れていないから起こるのではないか。
- ・普通に見られる光景ではないものに、人はびっくりしてしまう。
- ・むかしはむき出しの差別があったが、いまは学校などで「差別はよくない」と習う。ただ頭ではわかっている、ということが起こる。
- ・障がい者たちとの接点を「ふつう」と思う。「ふつう」になっていくことが共生だと思う。
- ・別に「あっ」と思うことはかまわない。そこから一步、受け入れるか否かの問題。

接点の少なさが話題にあがるなかで、福祉施設の話があがった。

むかしと違って、いまの障がい者は「地域に出ていくように」と言われている。どんな障がいがあっても、行事に参加したり、そういう流れになっている。

ただ最初のうちは悪く言われたり、「大きな声を出すから迷惑だ」「帰れ」「何しに来たんだ」と散々言われたらしい。しかし続けていくうちに、地域の人たちも受け入れてくれるようになる。目に触れることが大切である、という話だった。

障がい者に限らない。外国人も、LGBTQも、目に触れることで「日常」のなかに溶けていくのではないか、という内容になった。

最後に感想をいただいた。

- ・今回も新鮮で、楽しい時間でした。次回も……。
- ・人と話すこと。自分と話すこと。いろんな自分を認めること。
- ・最後の対話がとても心にひびいた。
- ・自分の狭い世界から抜け出せていない。ガラパゴスに住むシーラカンス状態。
- ・見えていない。
- ・僕のモヤモヤをみんなが聞いて、答えてくれて、ちょっと嬉しかった。
- ・仕事は少し置いといて。次は場所を。若い人を。型にはめず。やっぱり一歩ずつ。
- ・この場にいられることがありがたい。

- ・次の会を楽しみにしています。
- ・色々な意見を聞いて楽しいです。

第 2 回の話し合いを経て、次回以降も形に捉われず、開催していこうとなった。